

コラム

「O P E C 創立 5 0 年に向けて」

客員研究員 新井 光雄*

O P E C (石油輸出国機構) が来月 9 月 1 4 日に創立 5 0 周年を迎える。かつては泣く子も黙るといった威勢を誇った O P E C ではあるが、その存在感は一時ほどではなくなった。しかし、一方でその潜在力から隠然たる存在であることも間違いない。その O P E C が創立 5 0 年。O P E C がその力を思う存分示した第一次石油危機を想起せざるを得ない。

一次危機はもはや過去の歴史とも言えるのかもしれない。しかし、戦争体験、被爆体験と同じようにとまで言わないが、相応に風化させてはならない体験のひとつと個人的には思っている。

最近ではエネルギー関係者と話をしているが、当方は体験者、相手は非体験者ということが多々ある。で時々、意識のズレが生まれ、驚くケースが少なくない。議論していて何かが違うと気づくと、それが一種の世代間格差であることから来ると知り、多少のさびしさを持って納得となる。多分、戦争体験者がそれを語る時に同じような、それをはるかに超えるはがゆさを感じているのだろうと思える。

その石油危機は 1 9 7 3 年 1 0 月だった。新聞社の本社に地方から上がり、整理記者を一年やって経済部所属だった。担当は貿易記者クラブ。ジェットロにクラブがあり、いわば商社担当だ。大きなニュースで言えば、日中貿易問題、それに商社批判などが大テーマだった。そこで初めて気がついたことがある。大いに戸惑ったのだ。「貿易」にしる「商社」にしる、世界に繋がってのニュースを書くことだった。秋田支局五年の経験しかない。交通事故やら殺人事件やら大火やら、確かにニュースは書いてきていたが、国内、いや県内のニュースだ。たまに全国ニュースを書くことがあったとしても、あくまで国内である。それが一挙に世界を相手にしてのニュースとなる。それも一度として海外など行ったこともなく、行くだろうとも思えないというのに、国際的視野が必要になったのだ。正直、戸惑う。何を書いても外国が登場するのだが、読みかつ聞くことはできても、一度として行ったことのない外国との関係がニュース。戸惑うと同時に奇妙な印象だった。

そこに石油危機が発生する。同じ外国でもアメリカやら欧州、アジアなら中国などは行ったことはないが、耳学問が多少ある。比較的身近な存在だったかもしれない。しかし、中東となると想像すら難しかった。そこに第四次中東戦争から O P E C 主導の石油危機である。混沌のなかに落ち込んだ気分。ひょっとすると「日本沈没」か、との不安感に襲われてしまった。大仰でない。七十年弱の人生体験のなかで、「国家存亡」を意識したのは初めてだった。いまさらだが、日本はトイレトペーパー事件が象徴するように大きな混乱状態だったのだ。

従ってこの石油危機を個人的に総括すると「個人的な国際化」ということができる。その少し前にドルショックがあったが、秋田支局にいたからその意味が良く分っていなかったもので、この石油危機にはただ驚くばかり。夢中になって夜討ち、朝駆けでニュースを追った。やりがいもある

* 地球産業文化研究所理事 元読売新聞編集委員

った。メディア全体が正常なニュース判断ができなくなってしまうていた。「石油」が関連すれば全てニュース。分り易く言えば、通常であればベタ記事あたりで十分なニュースも、ちょっと「石油」の味付けをするだけでトップ記事に。その分、記者は緊張感を高めたが、大扱いされる記事には大満足。ある意味、不必要な情報合戦が展開されてしまうことになった。

当然、OPEC 関連は有無をいわずの大ニュース。総会記事は文句なしの一面トップ。思考停止の記事判断と今となっては言えるかもしれない。OPEC は強大な存在感を示す。

今、ヤマニ石油相と言って、それに反応する世代はどのあたりまでなのだろうか。一度、石油会社の若手に聞いてみたい。40代では知らないのかもしれない。OPEC 総会の花形スター的存在。サウジアラビアの石油相なのだが——。当方には個人的な思い出もある。アルジェの総会だった。この時、初めてヤマニ石油相を見た。話したのではない。見ただけだ。アルジェのホテル。エレベーターの前。多くの記者が取り巻き、会議の行方を質問する。しかし、ヤマニ石油相は無視。妙齢なご婦人とさっそうとエレベーターへ。誰かが、あれは愛人という。真偽のほどは不明だが、日本人記者の洒脱な奴が「あの香水たまらない。気が狂うようだ」と嬌声を上げる。それだけのことだが、会議の決定事項は忘れても、そのシーンだけはなぜか忘れないでいる。真面目な話ではやはり83年のロンドン総会。横暴OPECの最期の会議で、ここから今のOPECへ体質が改善を余儀なくされていく。

本質を離れた体験的OPEC感に過ぎないが、創立50年というのだから、このあたりで一度、「OPECとは何か——」を整理してみてもいいのかもしれない。急激な復権はないという見方が大勢だが、隠然たる力を発揮する場面が近い将来でてくる可能性があるとする指摘もある。半世紀というのはちょうどいい節目。専門家の本格的な論評を期待したい。

お問い合わせ：report@tky.ieej.or.jp